

前田雅之著『今昔物語集の世界構想』

千 本 英 史

すである種の「神話」として、幾たびも語られてきた、一九八二年六月、京都の花園大学での仏教文学会シンポジウム『今昔物語集』の構造をめぐって。その三人のパネラーのうちの二人、小峯和明、森正人の両氏があいっいで『今昔物語集』に対象を限定した論文集を刊行されたのは、その三、四年の後であった。その時以来長らく私たちは（論中に今昔への鋭い言及を含んだ前記パネラーの残る一人出雲路修氏や、逆に震旦部に限定して周到な分析を展開した宮田尚氏などの成果はあるものの）、『今昔物語集』の全体像を掴み取ろうとする専著を得られずにきた。前田雅之氏の『今昔物語集の世界構想』は、十五年ものその渴を癒す著であり、評者の思い込みによればまた、こうしたスケールで『今昔物語集』を語り尽そうとする「最後の」試みでもあろうか。

ここには奇しくもかのシンポジウムの翌年度末に『国文学研究』に発表された「今昔物語集本朝仏法伝来史の歴史叙述——三國意識と自國意識——」（本書Ⅱ部第2章）を皮切りとして、著者がこの間書きつづけてきた論考が、ほぼすべて、Ⅰ「仏陀・仏法・聖徳太子」、Ⅱ「歴史叙述と編纂意識」、Ⅲ「天皇・へ公」・

国家」、Ⅳ「世界構想と反世界Ⅱノイズ」の四部に分ち収められている。

発表年代別に整理して見ると、その前半部に属する諸編（一九九二年まで。なお初出一覧の「Ⅲ部4章」の九一年は誤植）はⅡ・Ⅲ部だけに集められ、Ⅰ・Ⅳ部には（Ⅰ部の一部に以前の論を含むが）主にそれ以降の後半部に書かれた諸編が配されていることがわかる。すなわち、著者の関心は主に、Ⅱ・Ⅲ部に論ぜられた諸課題の分析に始まり、その分析過程（主に聖徳太子の位置付け）からⅠで述べられた「仏」「仏法」の意味分析に至り、さらにその中でⅣ部に見られる『今昔物語集』像が導きだされたと覚しい。

以下、この部立てによって順次述べるが、本書は著者が自認するとおり、諸編で主題が重複したり、概念説明が後の章でなされる（Ⅱ部になってから、あらためて「説話」の定義を聞くこととなった）、重要な分析視角である「構成」の定義がⅡ部5章で突如語られたりする。これは論の初めに毎回全体状況を押さえて、その個別の発現を各テーマのうちに見出すという著者の基本的方法によるもので、読者にとって必ずしも親切とはいえないが、だからといって、ならばおまえならすべての論を組みなおしてみせるかといわれれば、それは到底不可能だろうから、著者が最低限の調整にとどめたのはやむをえない。ここではテーマにそつて他の部からも引用し、著者の考えを追ってみる。

まずⅡ部では、「三國意識と自國意識が折り重つて仏法伝来史は叙述され」（612）ていることが示される。これは著者のテーマ的文章である。「相互に個別的領域である三國（天竺・震旦・本

朝)において仏法が十全に弘通している事実が逆に仏法なる普遍性を証明することになるとする三国意識」は、「当時において例外的に全うな異文化理解」(p.362)に繋がったが、「対立する(敵)をもち、それを克服することによって、自己の存在理由を証明していく天竺・震旦両部に対して、本朝部は、はじめから仏法を受け容れる態勢が整った潜勢的な仏国土としてあった」(p.149)点に自国(優越)意識が見られる。

その場合の「(国家)」とは、今昔物語集がそれと認識した(「古代」において天皇が親政するとされた、疑似古代国家とでも言うしかない不可視の幻想であ」(p.139)り、「于今」に対応する過去とは、今昔物語集の依拠し、仮構した作爲的産物たる(始原)的歴史空間である。それは、「(仏法―自国意識―(公))」のトリアードが形成された聖徳太子―智證大師の時代であり、今昔物語集にとって輝かしい(「古代」)であった。いわば(「古代」)が再現前化した(「現代」)の意味である」(p.293)。

震旦においては、対応する位置は秦始皇帝に振り分けられる。「今昔物語集が仏法靈験がはじめて現れた時の皇帝を震旦の建国者であると捉えたからである」(p.161)。そうして「震旦の仏法と王権が同時に確立するという論理を採用した結果、本朝の王権を記すはずの巻(巻二十二)は遂に編纂されなかった」(p.169)。まことに見事な論といえよう。

そこから論は、天皇と公共性を課題とするⅢ部に進むが、こゝで著者がもっぱら依拠するのは、カール・シュミットの諸論である。シュミット(一八八八―一九八五)は、「その政治体制の原理

や性格をまったく異にする『ヴァイマル民主共和国』(議会制民主主義)と『ナチ第三帝国』(一党独裁)という二つの時代を生き抜き、そのさいに、まことに急激にかつ時々刻々と変化する現実政治の進行過程と自己の理論とを深くかかわらせながら、課題解決のための処方箋を次々に提起していった、きわめて実践的な政治・公法学者」(田中浩「カール・シュミット 魔性の政治学」一九九二)である。前田氏のシュミット理解は、おそらく田中氏のそれとはかなり異なるだろうが、(そうして評者にとっても田中氏の立場が全面的に肯定されるものではないが)、この序文での要約に関する限りは、前田氏も認めてくれるのではないか。

「今昔物語集のごとき世界的視野をその組織に具備したテクストでは、編纂行為はそのまま世界の分節化と再構築であり、外在する「公共性」とは無縁ではありえない」(p.257)。ここである「公共性」とは、「カール・シュミットの^{アレクサノフ}問題構制を継承してユルゲン・ハーバーマスが再構成した「代表的具現の公共性」」(p.252)の謂いである。

「『悪魔的』とも称されたカール・シュミットの慧眼が底意地悪く見抜いたように、王権・国家とは、むしろ、他国、言い換えれば、(他者)との関係性の中で自国の内的統一性やアイデンティティーを確立しうる共同幻想的有機体としての性格の方がより本源的性格なのである」(p.213)。三国における天皇号の分析(p.215)、そのことから新羅の位置づけ(p.219)、天皇と帝王の使い分け(p.217)、「世俗」における「世ノ人」と公共性(p.269)、いずれも目の覚めるような切れ味である。

著者のシュミットへの思いは深く、本書巻頭にも通例なら献辞が記されるスペースに「イロニーの中には、あらゆる無限定の可能性を留保しようとする衝動がある」（『政治的ロマン主義』）との彼の文言が掲げられる。しかしこの文言の意味するところはじつは評者にはよくわからなかったのである。

『政治的ロマン主義』はシュミットのごく初期の著作で、第一版は一九一九年に出版された。著者の引用が何によるのか確かめていないのだが、橋川文三訳（一九八二、未來社）では、それは次のようなくだりである。「ロマン主義者は現実を回避する、しかしイロニックにかけひきの気持をもってである。イロニーとイントリーグ *Intigue* は逃避する人間の気分ではなく、新しい現実を創造するかわりに、そのおりおりの現在の制約的な現実を無力化するために、一つの現実をもう一つの現実に対抗せしめようとする人間の能動性である。イロニーによって彼は窮屈な客観性から脱れ、何かの上に釘づけされることから身を守る。イロニーの中にはすべての限らない可能性の留保が含まれる。こうして彼はその内的な独創的自由を保持する」。シュミットはむしろこの本で、ロマン主義者を批判的に評している。直後に「その本質からすればロマン主義的イロニーは求められる客観性から己を保留する主観の手段である」とも述べている。また「イロニーの助けによって彼（ロマン主義者）は個々の実在から身を守ることはできた。けれどもそれは主観が自衛するための武器にすぎなかった。実在そのものは主観的には獲得することができない。そこでイロニーのかわりにやや異ったもの、見たところより偉大なるもの、すなわ

ち全体性^{トータルリテ}が入れかわった。全宇宙、全学問、全芸術を、彼は一挙に総体として *Einheits* 獲得することができた」などということばも見られる。なお、犀利なシュミットは一九二五年になって「重要ではないがいろいろと変更を加え増補し」て大幅な改定を施し、第二版を刊行したが、当該部分には大きな変更はないようだ（大久保和郎訳 一九七〇、みすず書房 一九九七 新装版）。

著者は『今昔物語集』を「『世界』を把握しようとする権力意志やそれに伴う快感、世界の整合性を期して生まれるものがき・苦しみ・たゆたう気まじめさ、世界を限なく見ようとして結果として逸脱してしまう間抜けさ、世界の中の本朝なのか本朝のための世界なのかを決定不能に陥れてしまう自国意識なるナショナルな情念^{感情}」(p. 2) の「葬き糞く」世界と捉えた。ここである「パトス的意思」とは、「未知なるもの」外部・他者への貪婪ともいえる視線とそれらを自己の言説で消化してしまいたいといった三国をも超え出る世界を支配せんとする深い欲望」(p. 20) のことである。ならば、『今昔物語集』はイロニーの世界ではありえない。あるいは、「原初的意志・理念・ノイズともなる諸々の欲望・微細なレベルにも及ぶ気まじめさといった今昔物語集に内在するすべてのベクトルが曼荼羅の如く整然と秩序化ないしは一つに融合される世界を時折夢想し幻視してみたい」(p. 23) とする本書の存在こそがイロニーというのか。

すでに与えられた紙数も尽きた。I部でつかの間の安定を得たかに見えた「秩序化、融合され」た『今昔物語集』像は、IV部に至るや内側から脱構築され、課題は「判断停止」を余儀なくされ

る。それはあたかも『今昔物語集』それ自体が「未完の」、永遠の文学運動を続ける作品であることに相似する。

著者自身によつてすでに、「今昔物語集は、只管、〈古代〉」〈国家〉という、自ら規定する最高の価値体系に基づいて、内なる国家、内なる日本仏法史を叙述したに過ぎなかったのだ。それにしても、今昔物語集編者をこのような意識に駆り立てた奥底にはいかなる情動があるのだろうか。これこそが今昔物語集を考える者の永遠の課題であろう」(p.152)。「この〈国家〉の卓越性を保証し支える二つ視座＝ベクトルの関係のありようは、今のところまだ判然としない」(p.226)、「〈世俗ないし非仏法〉説話・説話集と中世との関係性をめぐる総体的解明は今後に期したい」(p.277)と、問題の所在はそれぞれに明らかにされている。ならばその際の方法はいかにあるべきなのか。

評者は、シュミットについては何も知らないに等しいが、著者の分析方法はそのある種の唯パワーポリティクス論とでもいうべ

新刊紹介

梶原正昭・栃木孝惟・長谷川端・山下宏明編

軍記文学研究叢書 1

『軍記文学とその周縁』

軍記文学研究叢書は「軍記文学の体系的、総合的考察」をめざして刊行されている

きものに毒されているような気がしてならない。再々引用依拠される黒田俊雄権門体制論、顕密体制論に対しての著者の捉え方についても、同じような危惧を感じる。

文学もその研究もゲリラ戦でいいではないか。敵の食糧と武器をつねにわが糧と力として転用し、時には敵の兵士をわが方に組み込んで進んでいくことが必要なのではないか。それとも著者には日本古典文学の山脈は、山が浅すぎるか。

今後ともさまざまな視角で『今昔物語集』の特性を切り取る論文はできることだろう。しかし本書のように正面戦を仕掛け、それとがっぷり四つに取り組む著作は、もうなかなかでることはないだろう。その足跡に比すれば、『三経義疏』の作者問題や『日本霊異記』『本朝法華験記』の位置づけに若干の不满が残ることなどは、ささいな瑕でしかない。

(一九九九・一〇 笠間書院 A5判 五三六頁 一三〇〇円)

る。過去現在の研究史を受け継ぎ、軍記文学研究における新たな課題を明確に提示する試みであり、軍記文学研究を志す者には待望のシリーズであろう。

本論集は全十二巻のうちの第一巻として、軍記文学全体に関する論文が十三本収められている。第一章では「軍記文学の概念」が、示唆に富んだ諸論考によつて整理されている。第二章「軍記文学の展開」では変容していく軍記文学をめぐる、執筆者

がそれぞれの専門分野から独自の考察を行っている。第三章「学際研究の中の軍記」では比較文学、歴史学、民俗学、仏教思想、中国文学の立場から軍記文学が論じられ、また海外での日本軍記研究についても現状が紹介されている。

軍記文学を多様な視点から眺めるための、非常に意義深い一冊である。

(二〇〇〇・四 汲古書院 A5判 二九五頁 八〇〇円) [中久木美穂]